
タイムトラベル！！密室のサクリファイス

やってみよう会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムトラベル！！密室のサクリファイス

【Nコード】

N1499R

【作者名】

やってみよう会

【あらすじ】

おりやま織山 はくい佩亥はカメラマンである。

ある時は雪山、ある時は戦場、ある時はお祭り……。でも、その中で友人を失ってしまいそれは自分のミスのせいだと思いつく。

職業であるカメラマンを久しぶりに再開したのは、遙か未来でだった……。

ゲームの世界でBADENDを味わいながらもカメラを片手に必死に地上へ目指す！！ 亀更新です…すいません…。

現在

(前書き)

あああああああ！！！！！！！！！！

やっつてしもうたああああ！！！！！！

ノリで出してしまった！！

もし見たい人が出てきたら、覚悟決めます！！

現在

ああ、懐かしい夏空。

俺は織山おじやまはくい 佩亥フリーのカメラマンをやろうとして職業ミスって
ほぼニートになりかけている。

変な名前なのは気にしないでくれ。

それで、最低限の運動やゲーム、アニメ以外何もしなかったため
久しぶりに近くの公園にまで来たのだが、ちょうどいい具合の夕空
が映っていた。

「今は夏で夕方……。」

3

俺はすぐにカメラを取り出す。このきれいな夕焼けをフィルム・
・メモリースティックに焼き付けようとする。

電源を付けると画面にいろんな写真の画像が出て来る。
そして、写真を撮る準備が出来た。

「ようし！いい写真を撮るぞう！」

そうしてシャッターをきる。

カシャッ

「ん？」

何か近くで騒がしい声がする。

……ああ、お祭りだったな……。

懐かしい。本当に懐かしい。昔ははしゃぎまわったものだもんな

……。

「……久しぶりに、行ってみよっか！」

そう言っただけ歩き出した時、

パサッ

「おっとと

」

写真が一枚地面に落ちた。

そこには俺と他の人たち（外国人）が写っていた。そう、こいつらは外国の友人たちだ。

一緒に雪山で撮った写真。俺は引っぱられて今にもこけそうだ。

ついでにジョニスの野郎がシャッター切りやがってさ……。変な格好で写ってしまったんだ……。

……あいつら元気にやってんのかな？

結構心配になる。俺がこんなありさまだから……。

もつやめよう。せっかくのお祭りなんだ、楽しむと同時に写真を撮って行こう！

~~~~~

ガヤガヤガヤ……

「懐かしいな、おつ水風船取りもあるじゃん！

うわ、懐かしいよー！」

独り言が多くなってきているが気にしないでくれ。  
にしても久しぶりだ。このお祭りにはほとんど来た覚えがないほ  
ど。

ふと時間が気になり腕時計を見る。

8:51

「ああ！大変だ！もうすぐ始まってしまおう！」

俺は急いでお気に入りのスポットへ行く。

六十八階段を上り、お地藏さんを目印に右に行き、草むらをかき  
分ける

草で覆われた神社をゴールにし、この街全体が見れる、開けた野  
原で大の字になる。

8:59

9:00

時間が変わった瞬間にボツヒュー………という音が遠くか  
ら聞こえて、少し間をおいて

ドオオオーーーーー………ンッ………！！！！

綺麗な赤、黄、青、緑の華が夜空に浮かんだ。そう、花火である。  
すかさずシャッターをきる。

「うん、いい写真が撮れたぞ！」

俺はそこで終わるまで写真を撮り続けた。



現在

(後書き)

あの五人の中で好きな人はクロエかな・・・？  
でも、ミキも結構好きです(笑)

順番に言っと、

クロエ

ミキ

オルガ

イトカ

アスナ、かな？

皆さんはどのキャラクターが一番好きですか？  
それでは！



## タイムトラベル

(前書き)

時系列的に「ZERO」の初めからやってみようかな?と…。

結構知つとかなきゃつらいと思います…。(…)

## タイムトラベル

気がつくとも視界が白く染まっていた。  
すぐに黒く染まって変な機械の音がした。

「こいつ、生きていたのか……。  
一昔前の失敗作だと思っていたが…。」

なんて声が聞こえてきたため強制的に目を開ける。  
そこに立っていたのは動きやすそうな服を着ていて、茶色い汚れた布で顔を、髪を隠している大人の女性がそこにいた。

「ん？まさか！起動していたのか！？  
「というよりあなたは誰？ここはどこ？」

なんか見たことある女性とこれまたなんか見たことある研究施設  
っぽいところに俺がいる。しかも、寝ていたところは巨大な何かの  
装置だった。

……あれ？結構落ち着いてんな、俺。

「あ、ああ、私は『クロエ』だ。  
君は『ファウンデーション』に聞き覚えは？」

ファ、ファウンデーション！？！？そんなわけがない！！ファウ  
ンデーションはゲーム上の仮想世界であって……。などなど、色々

ショック？を受けていると、

「聞き覚えがないのか？」

ふむ、本当に過去の人間をタイムトラベル時限召喚するとは…。」

聞き慣れない言葉が聞こえた。た、タイムトラベル！？設定では未来ではあったが…まさか、管理局でそんなこともしていたのか…。

そして気になったのだが、何故か十六、七くらいの頃の身長に縮んでいた。それと、何故か制服も着ていてカメラのセットや大きなカバンがあった…。全部俺だ…。

もう、佩亥は考えるのはやめた。

始まってしまったのだから仕方ない…。そう思うことで気持ちを落ち着かせている。

「お前は過去で生きていた、そうだろう？」

「はい。こんな装置、見たことがないですからね。」

歩きながら俺のいた世界  
話を話す。

過去

のことを

そうしていつの間にかイトカの眠っている装置がある部屋にたどりついた。

そこは、まるで墓地だった。うす暗く、静かだ。そして、いくつもの棺が整然と並べられている。

俺がいる時系列は『ZERO』あたりの最初、イトカの目覚めだ

と思う…。

「これはコールドスリ・プ装置というんだ。  
ふう、とうとう見つけたよ。」

「この子は…？」

そこには少女　イトカが凍っていた。

すると『元クロエ』が装置の脇にあるコンソールへと手を伸ばす。

「今からお前を自由にしよう。」

「…え？」

もの凄い早さでキーを打ち込んでいた…。赤、青、黄に色を変え、最後に分かったのだろう、「WMBHF」と打ち込んだ。

「この程度のセキュリティか。」

おお！かっこいい！と感動している間にふたが完全に跳ね上がった。イトカはまだ眠ってる。

すると『元クロエ』が手に持った小さな機械をイトカの首筋にそつと当てる。

「おお…！すごい…！！！」

ついつい言葉に出してしまった。青白かった肌が徐々に、徐々に、わずかな赤みが差していったからだ。

「おまえが、イトカだね？」

「誰？」

ふと声が聞こえたので我に戻る。どうやらイトカが目覚めるまでボーっとしてたらしい。

「そこから出たいか？」

イトカは少し考えて、

「ううん。ここから出たって、いいことなんかないもの。」

「そうか？」

「いやな夢を見なきゃいけなくなるもの。」

「……。」

そういえば、イトカは嫌な夢を毎回見るんだっけ？

……それはそれで可哀そうだな……。

「それに、私が起こされるのは、みんなにひどいことをされる時だけ。」

「何をされるんだ？」

「注射とか、お薬とか……。」

医局の奴らは人でなしだな！！

そう思っているうちに

「目覚めたな。」

「え？」

我にもどる。すると、『元クロエ』がフードを脱ぎ捨てる。流れ落ちる髪は白色？いや、銀色だ。

暗い目は青色だと思う。そして色素の薄い、白い肌。

…そうだ、名前を思い出した！『オレンジ』だ…！

ことの発端として最初にアイコンパワフル活用した人だ…！！  
と思考をフルに使っていると、

「あ…。」

いや…！！」

と聞こえ、不意に足場が、頭上が、目の前が白い霞に囲まれて、  
嫌な浮遊感？を感じた。

まさか！？イトカの夢の中…？

そこまで答えを出した時、周囲を覆っていた霞のようなものが、  
徐々に晴れてゆき

「がつ…！！」

地面に落ちた。

体を起こし周囲を見回す。…ここは…！アスナのパパさんが働いて  
いたとこだ！……なんか、本当にファウンデーションに来たんだ  
な、つと改めて実感していた。

そこは、複雑な機械やパイプがひしめく、工場地帯のような広い  
空間だ。

そして、佩亥の記憶道理、けたたましい警報音がなりひびいてた。  
すると、

『総員は直ちに避難！現場は放棄する！繰り返す、総員は

』

おお、恐ろしいことになってんだな…！！

なんて思ってたカメラの準備をしている。佩亥は見たことのないよ

うなものを片っ端から写真に収めておきたい派だ。

「あなた…?」

と、聞かれたため、俺の事か?と振り向く。もちろんカメラは構えて。が、しかし、イトカの「あなた…?」は俺に向けてではなかった。

…オレンジさん、あんた、俺の存在忘れてるでしょ?と聞きたくなったが、今はシリアスなムードであるためふざけられない。

「これが、お前の夢か。」

「う、うん…。」

今の内にイトカと話せば物語が色々変わると思い、顔を見せないように他のとこの写真を撮る。

今、この『オレンジ』さんが話したのはなぜ『アイコンプロジェクト』が凍結したか、なぜここで事故が起こったのか。その中心が『イトカ』ということについてだ。

たしか、イトカは『世界を書きかえる』能力　涼宮ハヒ  
的な能力　を持ってたんだっけ…。んで、それが  
アイコン。

その膨大な力を利用してようと医局、管理局が協力し合い、イトカを造った　　これがいわゆるアイコンプロジェクト。そして過去も未来も「書きかえ」られる力を手にして、事故が起こった。

それがこの事故。そしてプロジェクトは凍結ってどこかな?

「なぜだ?自由がほしくないのか?」

「もう私、恐いのはいや。」

ん?あれ?そういえばこの展開、どう見ても『ZERO』の最悪

なパターンじゃね？いきなり、バッドエンドっすか……！でも、始まりがあれだったから…ああ、そうか。俺、五人が揃う少し前にいいのか！

そうじゃん！ここから始まってここでほぼ終わっていたということじゃないか！

とその時、

「地上というものを知っているか？」

「地上？」

…俺、知ってますよ？なんて言えない。もの凄いシリアスだから。少し勇気が足りていなかった。ああ、心の中も十六ぐらいになったか…。と懐かしさを感じていた。

「そこは、緑の植物が生い茂り、

空はどこまでも高く青く、

空気は無限に肺に流れ込み

太陽の暖かな光が降り注ぎ、

頬を撫でる風は芳しく、

時には恵みの雨が降る。

それが地上だ。」

あーうん、あってるっちゃあってるけど…。砂漠化してるところもあるし、ツンデレな雨も降る。合って無いところもあるよ。なんて言えない。もの（ry

「イメージを送ろう。」

あ、また話を聞いていなかった。オレンジが何か言ったのでよく見ると、その手には医療用スキャナが握られていた。





「ここは……？」

意識がもろろつとしていいる中、よく分からない場所にいた。

この白い空間の中、黒い影を見ることが出来た。

その瞬間佩亥の目は大きく見開いた。

「なんで修頭しゅうとうが居る……!! お前はあの戦場で死んだんじゃっ……!!」

「ごめんな……。佩亥……。」

「修頭……! お前は謝んなくていい! 俺が悪いんだから! だか」「アイコン」……?」

「お前をアイコンにしてしまった……。本当に、ごめんな……。」

「!?!?」

こいつは何を言ってるんだ? 俺がアイコンに??

そう考えている内に修頭と呼ばれた黒い影が消えてゆく。ゆっく  
りとだが、確実に。

「修頭! 俺はあきらめない! アイコンの力を使って必ずお前を迎えに  
行く……!」

黒い影くろいかげは佩亥はいがいとは違う方向に歩き出したがふと佩亥の方に振りか  
える。

「それまで首洗って待つとけよな……!」

「……………それはケンカの決め言葉だ。」

そうツツコミ、修頭は歩きながら手を振り消えていった。

佩亥は急に眠気を感じ、そのまま眠りに付いた……………。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.

## タイムトラベル

(後書き)

今回ののは『PUKKA RUMBA - 「密室のサクリファイス」攻略』と、

『あにおたゲーマーの溜息』さん達を参考に話を進めていこうかな？と思っています。

こちらの攻略サイトはとてもお世話になりました！ありがとうございます！

それでは！

誤文発見！修正完了

出会い

(前書き)

か、書けた〜〜…!

今回は 血

からです。

第三話、どじぞ!

## 出会い

「……………に……………がるわ!……………」

…ん?ここは?おお…!伝説の巨大プリンがなぜここに!?

「……………じょ……………ぶ?……………わ!」

「あはは、そんなに食べられないよ……………」

「起きなさい」

「んお!?敵襲か!?!」

「違うわよ……………じゃなくて、大丈夫?ここで何してたの?」

目を覚ますとそこには美人さんが居ました……………?。

段々思考が整い、今の状況を調べて見る。

鞆が一つ、カメラのセットは一式揃ってしっかり収まっている。

肝心のカメラは首から下げられている。学生服もしっかり着ているし、あの頃の戦場でいただいた拳銃が一丁と……………。

……………え!?!?なんであんの?

「ちよと?無視しないでよ。」

「んあ!わ、悪い……………」

「隔壁の向こう側に人が居るの」

「そこに行くのを手伝ってほしい、と?」

「ええ。」

今話してるこの美人な黒髪少女は確か

「あ、そうだ。自己紹介もしよう」

「え？ま、まあいいわ。」

私はミキよ。」

「へえ、道理で日系人な訳なのか…。」

ま、いつか。俺はハクイ。よろしく」

ミキだ。

ん？あれ？他のメンバーが居ない…？

そうか！今アスナは被曝してるんだった！

「で？この隔壁の向こうへどうやって行くんだ？」

「……………」

どうやらまだ考えている最中らしい…。

ふと、こここのステージを思い出す。

確かまずは

「ミキ、その植木をどけてくれないか？」

「え？ええ。」

俺達から見て右の植木をどけ、なんか変な床を見つける。

「下に空洞がある？」

「…そうっばいな…向こうに繋がってるかもしれない」

そこを開けると穴があった。

でも、降りれそうにない…。

…あ、そつか。この穴に近い引き戸を開けて…

「その引き戸を開けてくれ。何か使えそうなものがあるか調べてくれ。」

「分かったわ。…消火用のホースがあったわ！」

「よし！これで降りれる！」

早速穴から降りる。…見

「見ようかと思ってたら殺すから」

「ハハハ、ソナノオモツテルワケナイデスヨ」

「……はあ。」

溜息つかれた…。

っと降りれたな。じゃあアイテムを回収すつか。

降りてすぐのところ、左に鉄の板と

「何でそれが必要なの？」

「こついう古い場所はなんか壊れてるって決まってるんだ。

それに地震だってあるし。役に立ちそうだったら持っていくってのは常識だ。うん。」

「……そつかもね。」

…ふい〜、適当に言ったけど怪しまれずに済んだ…。

もし、「この後使うのさ」キリッ「なんてやって当たってたら怪しく思うもんな…。」

あぶね〜……。

んで次はっと…

ハクイは奥に進む。すると上に続く梯子があった。



が、その前に右つ側にあるバネを取って…。

「この梯子、登れそうね…。

見ないでよ？」

「ハイ。命に代えても…！」

梯子に掴み上へ上へと登った。

「そこにいる？」

「ええ！」

あ、思い出した。オルガだったと思う。

「この蓋そつちから開けられない？」

「…ごめんなさい。こちら側には取っ手が無いの。」

「…さつき拾ってたやつ、貸して？」

「ああ。」

さつき拾ったやつを渡す。

すると鉄の板を使い、それが金具にしっかりとハマった。

そしてバネも使って、金具と鉄の板の穴にはめた。

おお、スムーズ！

そしてその金具達を動かし、マンホール重い金属性の蓋が開く。  
すると

長い白髪の少女が手を差し伸べていた。

…眼鏡をかけ、にっこりしている…！この雰囲気はまさしく委員  
長キヤラだ…！

んなあほな事考えてたら、





とを思いつくあたり、俺は今何もできないのだ。  
未来の話なんだなと再度思う。

「父が医者だから、使い方が分かるだけ。」  
「それでも凄いと思う。」

と言ったときにオルガの冷静な様子がふと揺らいだ。

「どうかしたか？」

「……短期照射の痕跡があるの。」

「え？」

「これは…被曝してるわ。」

「…ひばく？」

やっぱりそうか…。ゲームどうりだ。

「だが、こんなところで被曝するなんてことはあり得るのか？？」

「ここの放射線レベルは正常よ？被曝したのは、ここではないわ。」

だからありえないと思うけれど？だいたい、ここは居住ブロックよ

？」

「んじゃあ、どこでそんな…？」

「このあたりの居住ブロックにはそんな危険な場所は無いし…」

今回の事故と何か関係があるのかしら。」

当たらずとも、とうからずってな感じかな？

この被曝は確かあの場所での出来事だもんな…。

「しかも、被曝後に移動したとなると…かなり時間が経っているってことね。」

眉間にしわを寄せせるオルガ。  
少し声を震わせながらミキが聞く。

「助かるの？」

「そのうち急変するはず。多分、あと2・3時間後くらい。」  
「そしたらもう……助からないわ。」

俺らは、アスナを助けるために考え始めた

T o b e c o n t i n u e d .

出会い

(後書き)

オルガの登場です!!

この五人の中で一番まともな子でしたが、僕的にはやっぱりクロエ  
ですかね〜。

今回はネタばれしまくっていますんで嫌いなお方はここでもどっ  
てくださいね

次回もネタばれされるかもしれませんからお気を付けて下さい  
(  
^ | ^ ; )

次回、

父親

からです!じゃね!

父親？

(前書き)

長いこと更新が遅れて申し訳ないです。  
本当にすいませんでした。

久々なもので、書き方が違ったりするかもしれませんが。  
ごめんなさい……。orz

## 父親？

オルガと俺は、暗い通路を急いでいた。

オルガは自分の手に、一人の人間の命がかかっていると自分に言い聞かせて。

ま、俺はオルガが何か困った時に助ける役としてだが。

そんな俺も、初めて人の命を預かった時のプレッシャーは今のオルガと同じだった。

それでも少し冷静でいられる分、オルガはやはり医局長の娘である。

彼女、オルガの事について少し説明しよう。

彼女は医局長の娘で、小さい頃から父親のような医師になるための英才教育を受けて来た眼鏡の委員長キャラの娘である。

父親は厳しい人であるため、もの凄くまじめっ子になったのである。

といった具合で、少し終わらそう。

オルガが止まり、きよろきよろと見回して溜息を吐いた。

「ここが医局なのか？」

「ええ。かなり時間は経ったけど、思ったより早くつけた…と、思う間に合うかもしれない。」

かもしれないとつけるということは間に合わないかもしれないとも言ってるんだよね…？

気がつく口にしていた。

「大丈夫だ。オルガ、必ず間に合うから。」



「それはどういった根拠で言ってるの？もの凄い自信満々のようだがどっ。」

「こ、これはまずい…！なんとか話題をそらさなければ…！」

「い、いや、『間に合う』『じゃなくて』『間に合わせる』だから！」

「…ふふ、まじめな顔で間違えることもあるのね。っと、急がなきゃ。」

「あ、ああ…。って、そっちは薬品庫なのか？」

「違うわ。そこが薬品庫で、こっちが私のお父さんの研究室なの。」

父親が医局長なのは知っていたが、初めて知ったようにしないと

…！

というか、記憶が曖昧になり始めてる…？

研究室に入ったのは良いが、何をどうすればいいのか分からなくなってきた…。

まあ、一度読んだところはスキップしまくったからな…。

「ってことは医局のお偉いさんの娘ってことか…。」

「そうよ。でも今回、それで助かっているんだから別に気にすることはないと思うわ。」

それより、私のお父さんのIDカードが薬品庫を開けるのに必要なの。

だから探してくれない？」

「ああ、IDカードが必要なのか…。」

よし、ヒントを貰った為、思いだしてきた。

確か机の引き出しの

「なあ、これ、怪しくないか？」

「え？あ、この引き出しの中よ。それよりも、どうやって開けるかが今は重要ね。」

「早くしないと間に合わなくなるわ。」

「さて、どうすればよかつたっけ？」

記憶の欠片を一つ一つ繋ぎ合せて思い出す。

「指紋認証？」

とオルガはためしに自分の指を装置に当ててみた。

低い機械音、まるでその指紋じゃあ駄目だぜ？と機械が言っているかのような音が鳴る。

「やっぱり私の指紋じゃ駄目ね。」

残念そうにオルガが呟いた。

さてさてエラーが出てきたぞ…どうするんだっただっけ…？

ああ、攻略ページがあればなあ、とか思いつつ部屋の中を見回し思い出してゆく。

まずは、

「オルガ、机の上にティーカップが置いてあるだろ？それはおじさんのじゃないのか？」

「ええ、これはお父様のよ…たぶん」

「なら、指紋とかがついているんじゃないか？」

「そうかもしれないわね…」

そう言っただけを見続けるオルガ。

過去のオルガの父親はオルガを厳しく育て、そして最後の最後でようやく一人前だと認めた頑固さんである。

いい父親なのか、悪い父親なのかは分からないが、娘のために厳しくしたと俺は思いたい…。

「ここではどんな紅茶を飲んでいたのかしら？」

少し微笑んでそう呟くオルガ。

とにかく、オルガの父が愛用していたカップをゲットする。

次に研究机の方に行って…なに取るんだっけ？

「…俺はこつちを探すから、オルガはそつちをお願い。」

「分かったわ。」

そして探し始めることになった。

つくづく思う。現実に見ればゲームより探すのは難しかったりもする、と。

あ、でも、とオルガがこつちに向かって、

「得体の知れない薬品には気をつけて。」

「あ。」

その時にはもう遅かった。

…やっっちゃったぜ

「あああああああ！」

俺の腕に何やら緑色の液体がかかり、数秒もしないうちに、液体がかかったら辺が緑色になり始めた。

Oh…ジーザス

そんなこともあったが、何とか一周して元の色に戻った。

え？これ大丈夫なん？なんかすごい色が一周して元に戻ったけれ

ど…。

「だ、大丈夫？すごい色から元に戻ったけど…」

「だ、だいじょぶさ！ほら、健康的な肌色だろ？」

そう言っ腕を出すとオルガは素早く腕に触り始めた。

うはぁ、こそばい。少しドキドキしているのを自覚する。そんな俺とは違い、オルガはムツとした表情に変わっていた。

「な、何か異常があつたのか…？」

「いや、異常は見当たらないけど…」

けど、何なんだろう…別に何もしていないのだが、何か羨ましそうな表情を浮かべているから俺の腕に何かがあるのだろう。

「けど、どうしたんだ？」

「…細くて白くて綺麗すぎる…！」

「…はい？」

何故か悲劇のヒロインのようなポーズをとりながら、必死に何かに訴えかけるように壁とお話を始めた。

確かに女っぽいとは言われたことはあるが、取材のためなら、と躊躇なしに女装だつてしたこともあるけど…。

「お、オルガ、さん？その、ナニカ（キャラ）が壊れそうなのでそのポーズはやめましょう？」

「ええ…。。分かってるわ…ただ、女として許せなかっただけ…。。」

うおおおい…！オルガさんやゝい！虚ろな目やで…。。

「あ、あの、そろそろ探さないと、マズイことになら」

俺はそこで話を止める。

オルガさんは、何故か目に嫉妬と羨み、更には怒りを浮かばせ、こちらをギロリツと人睨みしたからである。

あれ？こ、こんなキャラだったっけ？

「とりあえず、薬品に気をつけて…と、お？」

なんか見覚えのあるアイテムがそこにあった。

そう、白く、細い、テープが…！

思い出した！こいつであのカップから指紋を取ればいいんだった！そうすれば、あのロックの掛った引き出しを開けられる！

俺はすぐに行動に出た。

「オルガ！このテープでそのカップの指紋を取ってくれ！」

「え？ああ！そうすれば引き出しが開けられるわね！」

オルガは医療用テープを、父親が使っていたであろうカップに張り付け、指紋を付ける。

医療用テープにべったりと指紋をつけ、それを赤く光る鍵穴につけた。

すると、いい機械音が、少し騒がしかった部屋に小さく響いた。どうやら、ロックが解除されたようだ。

「あけるわよ？」

「いつでもいいぜ？」

と、そんな会話をしつつ引き出しを開けるオルガ。

ちなみに、さっきの目は解除されているから安心だ。

中には、とても豪華な医学書と、この世界のオロナンDと、書類が雑多になっっているだけだったが、オルガはその古い医学書に手を延ばしかけた時、その手が止まった。

「この本…。」

…そうか、この本もやはりオルガの父親の本なのだろう。

確かそうだったような気がするんだけど、大切に扱っていたはず…。

しかし、そういうのを分かっているからこそ空気を讀んでるけれど、ひとつ、言いたい。

…あの、俺を置いて、回想に入るのはいけないと、思うん、だけど…？

「…ふふっ」

「うお！び、びっくりしたあゝ…」

遠い目をしながら微笑んだオルガは、とても綺麗だったが、いきなり微笑するのに、俺はただびっくりするだけだった。

でも、それが普通の反応じゃないか、うん。

そしてそこでオルガの顔が赤い事に気がつく。どうやら彼女は、独り言とか聞かれたらすぐに恥ずかしがる、普通の子なんだろう。

「…み、見て、た？」

「…うんそれはもう、ばっちりと！」

「う、うわあああああああ！」

「痛い！タンマ、タンマあ！」

一刻を争う事態なのにもかかわらず、ふざけ過ぎである二人だっ

た。  
オルガが元に戻り（？）本をどかすとIDカードが下に置いてあった。

「さて、手に入れたことだし、早く薬品庫へ行こう！」  
「ええ！」

そうして、散らばってしまっている所をよけつつ薬品庫へ向かうと、堅くロックされている扉を見つけた。

「この中ね。」  
「ああ、しかもロックされている。」

そう言いながら近づいて行くと、テンキーのコンソールがあった。良く見ると、画面がバグを起こしている。

「これ、何を入力すればいいのかしら…？」

そう言いながらオルガは、ためしに何かを打ってみた。が、短い警告音と共に画面がErrorになってしまった。  
どこかにヒントはないかと画面をもう一度見る。すると、とある記憶がよみがえり…

「741…」  
「え？な、何で分かったの？」  
「ああ、この画面を見たらね、分かった。この棒たちをつなぎ合わせるよ、な？」  
「ああ…そんな単純なことだったのね………」  
「はは、どうだ。」

そう言いながら俺は腰に手を当て、胸を出して自慢をすると、オルガは「はいはい、すごいすごい」と苦笑いしながらテンキーを打っていた。残念な気持ちになったのは言うまでもない……。

全部打ち終え、エンターキーを押す。すると、電子的な音がなり、重く、閉ざされていたドアがゆっくり開き始めた。未来的な（まあ未来なんだが）ものを見ることは、新たな発見のようでとても面白いものである。

ドアが開き終わると、中身が露わになった。それは、間違いなく何かが入っている、と同時に、お目当てのものが入っているに違いない、フタのついた棚だった。するとオルガは、下から二段目の、右から二番目にある棚を見つけて「あった、このボックスを開ければ……」と呟きながら、オルガの父のIDカードを取り出し、IDカードを識別する（ような）装置にかざした。すると、数字が書かれたパネルが現れた。オルガが「これは……。」と声を漏らす。

凄いセキュリティだな……。俺はそんなくだらんことを考えつつ、入力しなければならぬ暗証番号を必死に思い出していた。8桁の暗証番号。ランダムな数字を入力しても、正解にたどりつくのは、不可能といつてもいい。だからといって、ちまちまと1から入力して試す時間もない。

隣を見ると、オルガが眉をひそめたのが分かる。ま、当り前ですわ。俺でもお手上げだ。何か、思い出すヒントさえあれば……。

その時だった。

突然響いたその声は、俺の好きなキャラクターの声であり、でもってこのサクリファイスで一番の恐ろしい考えを持つ少女の声だった。

「ここは何をしている？」



オルガと同時に振りむくと、少女が一人立っている。といっても、俺は若返ったから、今の俺からすると、同い年の女の子という表現が正しいのだからうけど…。

「誰だ……？」

「お前らこそ誰だ。」

とても冷たく返されました。はい。そんなもって、眠つきも、刺すように鋭いっす。

しかし、俺はこんな目をされるのは、初めてじゃないため、眉をひそめたりなどせず、苦笑いをしている。

「何でここにいる。」

「……まあ、ちよつといろんな事情があつてだな……」

威圧的な雰囲気気圧され、オルガは答えられない状態にいるから、俺が代わりに答える。が、不意に女の子の瞳が興味深げに細められた。

あ、な〜んか嫌なよか〜んが〜

「そのIDカードはどこで手に入れた？お前のカードでは無いのだからう？」

すると、冷たいそのまなざしのまま、のどの奥を鳴らすようにクツクと笑った。

うわあ、背筋がゾってなった。ゾって。まだ向こうに居たころは、声優さんスゲーな〜って思ってたんだけど、現実に居たらこんな感じだったのか…。

と、俺がくだらないことを色々考えていると、

「警戒するな、大したものだと思ったただけだ。」

と言われ、ふと隣を見ると、何かほっとした(？)ような、しかし、警戒を怠らん(むずかしい)顔をしているオルガが居た。

「ああ、そうだろう?。」

しかし、ここがチャンスだろう?さっきは「はいはい」とオルガに苦笑されたが、今度こそはしっかりと「すごい!」なんて言葉を...

そう思っていた俺だが、よく見よう。彼女は「空気読め。」と言っているかのように、目の温度が下がっていく。何か、申し訳ないことしたような、残念な気持ちに...: デジャビュ?

「なら、その先を開けることは、出来ないのか?。」

「うっ...まあ、ヒントが無いからな...。」

質問されて、答えるのに一瞬言葉が出なかった。少し悔しいです。そして、思い出せる(.....)(ヒントを下さい。すると彼女は、

「なら、手伝ってやるうか?。」

と言ってきた。それにオルガが虚ろを突かれたのか「え?。」と訊き返した。続けて俺も訊く。

「どうしてだ...?。」

「数字のパズルは得意だ。ククッ」

はい、また笑う...。さすがに慣れてきたので、過敏に反応するの

をやめ、真面目に聞く。彼女は言うてから、肩をすくめて続ける。

「いや、実は、それを解くキーを持っている。」

「え!?!」

「…所謂、ヒントか何かだろ?」

「正解だ。」

オルガは驚き、面白い顔をするが、俺は冷静にヒントを待った。見せてきたのは1枚のメモ。表の中に数字がびっしり書き込まれ、一番左の列には、英字が振られている。それは何かの暗号表だった。その時、俺の頭の中に電撃が走る。

分かった(……)のだ。この暗号の解き方を。

いや、正確には解き方を思い出した(……)と言っべきだろう。これを俺は知っている。最初の難関である、あの謎だ。

そこまで思い出していると、オルガは少し間を開けて、

「……どうすれば、開けられるの?」

と、クロエと名乗った彼女に訊いた。するとクロエは、口元に小さな笑みを浮かべると、

「この解読表を使うには、元になるワードが必要だ。」

と言った。いや、もう分かっただけだね。用は、今見せてくれた二桁ずつに分けて書かれた何かの表みたいな紙に英字をヒントに入力する8桁の数、つまりは四つの英字をその2桁一組の数字に変換させるということだ。そのワードは…

そこまで考えていると、まったく同じことをクロエが言い、オルガが疑問に思ったことを言った。

「そんなこと、どうして分かるの？そもそも、その変換表って…」  
「どこだっていい。」

しかし、オルガの質問に対し、クロエはピシヤリと話を切った。  
オルガは詮索を諦める。

その一部始終を見た俺は、ただ苦笑いするしかなかった。うん。

「お前、何か四文字のワードに心当たりはないか？」  
「むっ」

あ、今ムツてした。オルガが少し気にくわない点があるらしく、ムツとしたが、すぐに考え始めた。まあ、一刻も早く薬を手に入れなければならぬから、なにが気にくわないか俺も考えないけど…  
…声に出てたよ？

クロエは気にしてないっぽいね…。

俺もそれに気を向けず、暗号表を受け取る。そして見て思い出した。答え（ワード）は、オルガの持つ、あのカードに書いてある『ICON』の四文字だ。フハハ、どうだ俺の記憶力。あてになるかならんか分からんだろっ？

……自分で言ってる悲しくなってきた。

そんなバカなことを考えていると、オルガは歩きだした。暗号表を見ながら。

さて、問題だ。オルガは暗号表を見ながら歩き始めた。見た感じ、とてつもないくらい集中している。あ、ヒント、床にはカートや薬品が散らばっている。ここから連想されるのは……。

「おい、あぶっ」  
「きゃあっ！」「どおー！」「どおー！」

はい、転んじやいましたよこのドジっ子は！巻き添えに俺を選んで！しかし、最悪な事態はまだ続いていた。

ビリッ

『あっ』

三人同時に声に出した。いやあ、参ったねこりゃ。スツと、音の発生源の方を見ると、瓶が割れ、薬と思わしき液体と、破れてしまった暗号表と思わしき紙が合体してしまっていた。……この、ドジっ子を超えた委員長（つぽい子）はドジっ子から不幸少女へとランクアップだ。なんてことを一瞬で考えたが、他の二人の顔は青い。

『あああああああああ！』

「くそっ！なんてことをしてくれた！」

「いや、その、う、ごめんなさい！」

クロエが怒り、オルガは必死に謝った。どちらも必死である。ま、俺は答えを思い出したので。さつとどいてくれたオルガに謝られつつ、例の棚へと向かった。二人は言い合っつのを止め、俺について来る。どうも不思議に思われているっぽい。しかし、忘れぬうちに解いておきたい俺は、それを気にせず、特殊な装置であるテンキーに、八桁の数字を打ち込んだ。

「5・7・0・8・5・4・6・2……」

すると、機械的な音になり、カチリという音と共に薬棚の扉が開いた。俺は後ろをいったん振り返り、親指を立てて言う。

「開いたぜ！」

「すごい！暗号も無しで開けるなんて……」

そう言っただけで寝てくれたあと、はっと思い出したかのように目当ての小瓶を取り、鞆にしまい込んだ。すると、安堵の溜息を吐き、安心した声音で呟いた。

「良かった……。これであの子が助けられる。」

「そうだな……。ん？」

俺も安心して、ほっとため息混じりに頷くと、クロエに異変が見られた。オルガも同様に振り返るが、クロエは何かに気を取られたように、空を凝視していた。顔は少しひきつってるように見える。

「57085……。？」

「その数字がどうかしたか？」

さっきの数字の最初だけ呟いたクロエに、俺が話しかけると、ビクリ、と肩を震わせた。そしてすぐに向き直り、何も動揺してませんよ？というように冷たい無表情へと変えた。…キリツとか呟きそうになった。あぶねえ…呟いたら死んでるところだった……。

「関係ない。…なんだ？」

「い、いえ……。何でもないわ。」

クロエは俺に冷たく言い放ち、オルガにはじっと見られていたの  
で、冷たく聞かれた。それにオルガは、慌ててクロエから目を逸らした。目を逸らされたクロエはこちらを睨んできた。おう、そんなんがどうした。死の視線をいくつも見てきた俺はこんなもんじゃ怯まない。

「それじゃあ行こうかい、お二人さん。急がないとな。」

「ええ。」「行くつてどこへ？」

「さつき話したでしょう？ 病人が待つてるって……。」「  
なぜ、私も行かなければならない？」

「……クロエさん？」

一瞬、何も言えなくなり、言葉が詰まった。ま、当り前だろう。  
知らないやつについて行くのはとても危険だ。しかし、今の状況は  
とてもおかしんだよな。

そこら辺にあってもおかしくない、死体が無いのだ。どちらかとい  
うと、一人で行動するのは危険だ。なにが起こるか分からんしな  
しかし、クロエはとあるヒントを辿っているんだっけ？と、物語で  
一番重要な部分を思い出す。細部までではなかったため、結構あや  
ふやであるが……。

「だ、だって。ココはこんな状態で……」

「クロエも避難の途中だろ？ だったら俺たちと一緒に」

「一緒に？……フン」

「むっ」

まあ、無理だろうと思いつつ訊いてみたら、案の定、鼻を鳴らさ  
れた。ちくせう。それと、また声に出ていますよ。そんなのんき  
にしていると、オルガが苛立たしさを隠しきれないまま、言った。

「分かったわ、もう誘わない。行きましょう？ ハクイ。」

「んお？ おい。」

「じゃあクロエ、助けてくれてアリガトウ。あなたもお気をつけて」

そう言つてオルガは、大事な薬が入った鞆を肩から掛けなおし、  
さっさと踵かかとを返して部屋を出る。むう、何を子供みたいに怒るんだ。

あ、子供か……。ふと、思ったのだが、自分も子供に戻ったから、精神年齢も下がるのでは？しかし、内面の俺はやはり大人のままだ…。

ま、いつか。難しい考えは放棄するに限る。まる。

とりあえず、相当気が立っているな。まずはそこを何とかしてやるつか。そう思い、部屋を出ようとする。そこで少しあしをとめ、言う。

「オルガは少し気が立っているんだ。そこまで気にしないでくれるといいと思っぜ。」

「それがどうした。」

「それだけさ。じゃ、また会えたら。」

そう言っつて部屋を出た。たぶんこの後、彼女クロエは本からとあるヒントを破いて持つて行くだろう。そう予想をしつつオルガに会うと、オルガは「さっきはごめんなさい。無視なんかして…」というので別に気にしていないといいつつ、動こうとするが、どうやらオルガはクロエを待つらしく、そのまま動かなかった。そして、

「……まだいたのか？」

「あなたこそ何をしていたの？」

おおつ、重たい空気になり始めたぜ。どちらも冷たく言いあい、少しの間静かになった。やがてオルガが折れ、「二人のところへ戻るわよ」とモノを言わせぬ言い方でとことと歩き始めた。俺は少し微笑みながら『諦める』とクロエに目で合図を送ると、クロエもこちらを見て、肩をすくめて俺と共にオルガの後を付いて行った。あとオルガ、お前はホントにドジっ子、もしくは不幸少女じゃないか？



髪の毛にテープが付いている。

T o b e c o n t i n u e d .

父親？

(後書き)

えっと、今回はオルガルートの『父親』です。

しかし、オルガが主役というメインが、僕的にはサブなんです。

なぜならば、ここで！ついに！クロエがはーつとーじょー！！だーい！！

だからです。

あと、主人公は記憶が曖昧になってきました。

ネタばれはあるかもしれないから気を付けて下さい！

次回、

数字

からです

！じゃあね！

読んで下さって、ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1499r/>

---

タイムトラベル！！密室のサクリファイス

2011年12月11日19時47分発行